1 食肉の流通

(1) 肉豚の概要

ア 豚のと畜状況
豚のと畜頭数は1,639万5千頭で、前年に比べ2.5%減少した。（図1、表1）

イ 食肉卸売市場における豚肉の状況

（7）取引状況
食肉卸売市場（中央卸売市場10、指定市場18）における豚肉の取引成立頭数は216万1千頭で、前年に比べ1.4%減少した。市場別では、中央卸売市場が91万頭で前年に比べ3.1%減少し、指定市場が125万1千頭で前年並みであった。
全国のと畜頭数に占める食肉卸売市場取引成立頭数の割合は13.2%で、前年に比べ0.2ポイント上昇した。（表2・3）
図2 豚肉の規格別卸売価格の推移

(イ) 卸売価格の動向（1kg当たり平均価格）

食肉中央卸売市場における豚肉の規格別卸売価格は、「極上」が733円、「上」が469円、「中」が442円、「並」が409円、「等外」が303円で、前年に比べそれぞれ12.6%、2.9%、4.5%、7.3%、31.2%上昇した。（図2、表4）

表3 豚肉の全国と畜頭数に占める食肉卸売市場取引成立頭数の推移

<table>
<thead>
<tr>
<th>区 分</th>
<th>全国と畜頭数</th>
<th>食肉卸売市場</th>
<th>割 合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>千頭</td>
<td>千頭</td>
<td>%</td>
</tr>
<tr>
<td>平成22年</td>
<td>16,807</td>
<td>2,191</td>
<td>13.0</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>16,395</td>
<td>2,161</td>
<td>13.2</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(4) 卸売価格の動向（1kg当たり平均価格）

食肉中央卸売市場における豚肉の規格別卸売価格は、「極上」が733円、「上」が469円、「中」が442円、「並」が409円、「等外」が303円で、前年に比べそれぞれ12.6%、2.9%、4.5%、7.3%、31.2%上昇した。（図2、表4）

表4 豚肉の規格別卸売価格（食肉中央卸売市場）

<table>
<thead>
<tr>
<th>区 分</th>
<th>単位</th>
<th>極上</th>
<th>上</th>
<th>中</th>
<th>並</th>
<th>等外</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>平成22年</td>
<td>円/kg</td>
<td>651</td>
<td>456</td>
<td>423</td>
<td>381</td>
<td>231</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>%</td>
<td>733</td>
<td>469</td>
<td>442</td>
<td>409</td>
<td>303</td>
</tr>
<tr>
<td>対前年比</td>
<td>%</td>
<td>112.6</td>
<td>102.9</td>
<td>104.5</td>
<td>107.3</td>
<td>131.2</td>
</tr>
</tbody>
</table>
(2) 肉牛の概要

ア 成牛のと畜状況

成牛のと畜頭数は116万6千頭で、前年に比べ3.6%減少した。
このうち、和牛は51万8千頭、乳牛は41万頭で、前年に比べそれぞれ1.5%、1.3%増加したが、交雑牛が22万2千頭、その他の牛が1万6千頭で、前年に比べそれぞれ19.4%、13.1%減少した。

成牛の種類別と畜頭数割合をみると、和牛は44.4%、乳牛は35.2%で、前年に比べそれぞれ2.2ポイント、1.7ポイント上昇したが、交雑牛が19.1%、その他の牛が1.4%で、前年に比べそれぞれ3.7ポイント、0.1ポイント低下した。（図3、表5）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>和牛</th>
<th>乳牛</th>
<th>交雑牛</th>
<th>その他の牛</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>平成14年</td>
<td>1,263</td>
<td>1,202</td>
<td>1,256</td>
<td>1,221</td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>1,221</td>
<td>1,209</td>
<td>1,199</td>
<td>1,227</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>1,217</td>
<td>1,209</td>
<td>1,199</td>
<td>1,227</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>1,209</td>
<td>1,199</td>
<td>1,227</td>
<td>1,217</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>1,209</td>
<td>1,199</td>
<td>1,227</td>
<td>1,217</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>1,209</td>
<td>1,199</td>
<td>1,227</td>
<td>1,217</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>1,209</td>
<td>1,199</td>
<td>1,227</td>
<td>1,217</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>1,209</td>
<td>1,199</td>
<td>1,227</td>
<td>1,217</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>1,209</td>
<td>1,199</td>
<td>1,227</td>
<td>1,217</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>1,209</td>
<td>1,199</td>
<td>1,227</td>
<td>1,217</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：1 割合の計が100%にならないのは、四捨五入によるものである（以下各表において同じ。）。
2 構成比は、原数（Ⅱ統計表における表章単位）より算出している（以下各表において同じ。）。

図3 成牛の種類別と畜頭数の推移（全国）
食肉卸売市場における牛肉の状況

(7) 取引状況

食肉卸売市場（中央卸売市場10、指定市場18）における成牛の取引成立頭数は40万頭で、前年に比べ5.1％減少した。市場別では、中央卸売市場は29万6千頭、指定市場が10万4千頭で前年に比べそれぞれ3.7％、8.9％減少した。

畜種別では、和牛は21万5千頭で前年に比べ3.1％増加したが、乳牛が7万2千頭、交雑牛が11万1千頭、その他の牛が2千頭で、前年に比べそれぞれ0.5％、19.5％、24.8％減少した。

全国のと畜頭数に占める食肉卸売市場取引成立頭数の割合は34.3％で、前年に比べ0.6ポイント低下した。（表6・7）

表6 食肉卸売市場の成牛の取引成立頭数の推移

<table>
<thead>
<tr>
<th>年次</th>
<th>単位</th>
<th>市場別</th>
<th>畜種別</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>千頭</td>
<td>中央卸売市場</td>
<td>指定市場</td>
</tr>
<tr>
<td>平成22年</td>
<td>421</td>
<td>308</td>
<td>114</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>#</td>
<td>400</td>
<td>296</td>
</tr>
<tr>
<td>対前年比</td>
<td>%</td>
<td>94.9</td>
<td>96.3</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表7 成牛の全国と畜頭数に占める食肉卸売市場取引成立頭数の推移

<table>
<thead>
<tr>
<th>年次</th>
<th>全国と畜頭数</th>
<th>食肉卸売市場</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>割合</td>
<td>千頭</td>
</tr>
<tr>
<td>平成22年</td>
<td>1,209</td>
<td>421</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>1,166</td>
<td>400</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(8) 卸売価格の動向

食肉卸売市場における牛肉の規格別卸売価格を対前年騰落率でみると、「A-1」、「B-1」及び「C-1」規格が前年を上回ったものの、その他の規格は前年を下回った。（図4）
(3) と畜場の状況

ア 平成23年の全国のと畜場数は195場で、前年に比べ3場減少した。
と畜場の種類別と畜場数及び構成割合をみると、食肉卸売市場併設と畜場が27場で13.8%、食肉センターが72場で36.9%、その他が96場で49.2%となっている。（表8）

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>単位</th>
<th>計</th>
<th>食肉卸売市場併設と畜場</th>
<th>食肉センター</th>
<th>その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>と畜場数</td>
<td>場</td>
<td>195</td>
<td>27</td>
<td>72</td>
<td>96</td>
</tr>
<tr>
<td>平成22年</td>
<td>198</td>
<td></td>
<td>27</td>
<td>73</td>
<td>98</td>
</tr>
<tr>
<td>構成比</td>
<td>%</td>
<td>100.0</td>
<td>13.6</td>
<td>36.9</td>
<td>49.5</td>
</tr>
<tr>
<td>平成22年</td>
<td>100.0</td>
<td></td>
<td>13.8</td>
<td>36.9</td>
<td>49.2</td>
</tr>
</tbody>
</table>

イ 豚及び成牛のと畜頭数規模別と畜場数及びと畜頭数をみると、豚を処理したと畜場数は165場、と畜頭数は1,639万5千頭であった。これをと畜頭数規模別にみると、10万頭以上のと畜場数は67場、と畜頭数は1,322万5千頭でそれぞれ40.6%、80.7%を占めている。
また、成牛を処理したと畜場は148場、と畜頭数は116万6千頭であった。これをと畜頭数規模別にみると、1万頭以上のと畜場数は41場、と畜頭数は76万9千頭でそれぞれ27.7%、66.0%を占めている。（表9）

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>単位</th>
<th>豚</th>
<th>成牛</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>と畜場数</td>
<td>場</td>
<td>169</td>
<td>16,807</td>
</tr>
<tr>
<td>平成22年</td>
<td>198</td>
<td>151</td>
<td>1,845</td>
</tr>
<tr>
<td>構成比</td>
<td>%</td>
<td>100.0</td>
<td>28.4</td>
</tr>
<tr>
<td>平成22年</td>
<td>100.0</td>
<td>25.7</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

表9 と畜頭数規模別と畜場数及びと畜頭数の推移（全国）
2 鶏卵の流通

（1）鶏卵の生産量

平成23年の鶏卵生産量は248万3千tで、前年に比べ1.3%減少した。

都道府県別の構成割合をみると、茨城県が7.6%と最も高く、次いで千葉県が7.4%、鹿児島県が6.8%、広島県が4.9%、岡山県が4.8%となっている。（図5、表10）

表10 鶏卵生産量（全国及び上位10都道府県）

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>実数</th>
<th>対前年比</th>
<th>平成23年構成比</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>千t</td>
<td>千t</td>
<td>%</td>
</tr>
<tr>
<td>全国計</td>
<td>2,515</td>
<td>2,483</td>
<td>98.7</td>
</tr>
<tr>
<td>茨城県</td>
<td>189</td>
<td>188</td>
<td>99.4</td>
</tr>
<tr>
<td>千葉県</td>
<td>189</td>
<td>184</td>
<td>97.3</td>
</tr>
<tr>
<td>鹿児島県</td>
<td>167</td>
<td>169</td>
<td>101.1</td>
</tr>
<tr>
<td>広島県</td>
<td>120</td>
<td>121</td>
<td>100.9</td>
</tr>
<tr>
<td>岡山県</td>
<td>123</td>
<td>118</td>
<td>96.5</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>101</td>
<td>104</td>
<td>102.9</td>
</tr>
<tr>
<td>新潟県</td>
<td>98</td>
<td>102</td>
<td>104.9</td>
</tr>
<tr>
<td>愛知県</td>
<td>107</td>
<td>102</td>
<td>95.6</td>
</tr>
<tr>
<td>青森県</td>
<td>88</td>
<td>90</td>
<td>101.8</td>
</tr>
<tr>
<td>兵庫県</td>
<td>82</td>
<td>83</td>
<td>100.7</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>1,250</td>
<td>1,220</td>
<td>97.6</td>
</tr>
</tbody>
</table>

図5　鶏卵生産量の推移（全国）
(2) 鶏卵の出荷状況

鶏卵出荷量は240万8千tで、前年に比べ1.4%減少した。

全国農業地域別の構成割合をみると、千葉県、茨城県を中心とする関東・東山が最も高く、出荷量の24.7%を占めている。次いで、鹿児島県、福岡県を中心とする九州が15.2%となっている。（表11）

表11 鶏卵の全国農業地域別出荷量

<table>
<thead>
<tr>
<th>区 分</th>
<th>実 数</th>
<th>対前年比</th>
<th>平成23年構成比</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>千t</td>
<td>%</td>
<td>千t</td>
</tr>
<tr>
<td>全 国</td>
<td>2,442</td>
<td>98.6</td>
<td>2,408</td>
</tr>
<tr>
<td>北 海 道</td>
<td>99</td>
<td>102.8</td>
<td>101</td>
</tr>
<tr>
<td>東 北</td>
<td>351</td>
<td>92.7</td>
<td>325</td>
</tr>
<tr>
<td>北 陸</td>
<td>141</td>
<td>103.4</td>
<td>145</td>
</tr>
<tr>
<td>関 東・東山</td>
<td>604</td>
<td>98.4</td>
<td>594</td>
</tr>
<tr>
<td>東 海</td>
<td>293</td>
<td>101.3</td>
<td>297</td>
</tr>
<tr>
<td>近 畿</td>
<td>131</td>
<td>99.5</td>
<td>130</td>
</tr>
<tr>
<td>中 国</td>
<td>301</td>
<td>98.3</td>
<td>295</td>
</tr>
<tr>
<td>四 国</td>
<td>131</td>
<td>98.8</td>
<td>129</td>
</tr>
<tr>
<td>九 州</td>
<td>369</td>
<td>99.2</td>
<td>366</td>
</tr>
<tr>
<td>沖 縄</td>
<td>23</td>
<td>102.2</td>
<td>24</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(参考) 卸売価格（鶏卵市況情報）

図6 鶏卵卸売価格の推移
（東京全農系、M規格、中値）
3 食鳥の流通

(1) 食鳥の処理量

全国の処理羽数は肉用若鶏が6億1,717万6千羽、廃鶏が8,887万9千羽で前年に比べそれぞれ2.6%、2.4%減少したが、その他の肉用鶏が800万6千羽で、前年に比べ2.0%増加した。

全国の処理重量は肉用若鶏が178万3,393t、廃鶏が15万4,004tで前年に比べそれぞれ2.8%、2.9%減少したが、その他の肉用鶏が2万4,901tで、前年に比べ1.3%増加した。（表12）

表12 全国の食鳥処理量（全国）（平成23年）

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>処理量（生体）</th>
<th>対前年比</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>羽数</td>
<td>重量</td>
</tr>
<tr>
<td>肉用若鶏</td>
<td>617,176</td>
<td>1,783,393</td>
</tr>
<tr>
<td>廃鶏</td>
<td>88,879</td>
<td>154,004</td>
</tr>
<tr>
<td>その他の肉用鶏（地鶏等）</td>
<td>8,006</td>
<td>24,901</td>
</tr>
</tbody>
</table>

アー 肉用若鶏

都道府県別の出荷羽数割合をみると、鹿児島県が19.8%と最も高く、次いで宮崎県が18.5%、岩手県が15.4%となっており、上位3県で出荷羽数の約5割を占めている。（図7）
イ 廃鶏
都道府県別の出荷数割合をみると、茨城県が7.4%と最も高く、次いで鹿児島県が7.1%、千葉県が6.9%、愛知県が5.4%、岡山県が5.0%となっている。（図8）

図8 廃鶏の都道府県別出荷数割合

ウ その他の肉用鶏（ふ化後3か月齢以上）
都道府県別の出荷数割合をみると、徳島県が24.0%と最も高く、次いで兵庫県が9.2%、福島県が8.5%、愛知県が7.8%、秋田県が6.0%となっており、上位5県で出荷数の約5割を占めている。（図9）

図9 その他の肉用鶏の都道府県別出荷数割合
（2）食鳥処理場数
食鳥を処理した全国の食鳥処理場数は527場で、1処理場当たり処理重量は3,724tとなっている。 （表13）

表13 食鳥処理場数及び1処理場当たり処理重量（全国）

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>営業年</th>
<th>単位</th>
<th>1）食鳥処理場</th>
<th>食鳥の種類</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>肉用若鶏</td>
</tr>
<tr>
<td>処理場数</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>平成22年</td>
<td></td>
<td>場</td>
<td>520</td>
<td>165</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td></td>
<td>%</td>
<td>101.3</td>
<td>97.6</td>
</tr>
<tr>
<td>1処理場当たり処理重量</td>
<td></td>
<td>t</td>
<td>3,881</td>
<td>11,122</td>
</tr>
<tr>
<td>平成22年</td>
<td></td>
<td>%</td>
<td>96.0</td>
<td>99.6</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注1）は、食鳥を処理した実処理場数であり、1処理場で複数の処理を行っている場合があることから、食鳥の種類の計とは一致しない。

（参考）卸売価格（食鳥市況情報）

図10 ブロイラー卸売価格
（東京、中値、もも肉）の推移